

キューポラのある街

2008(平成20)年10月12日鑑賞<DVD鑑賞>

★★★★★



監督＝浦山桐郎／原作＝早船ちよ／出演＝吉永小百合／東野英治郎／杉山徳子／市川好郎／浜田光夫／鈴木光子／森坂秀樹／浜村純／菅井きん／加藤武／殿山泰司（日活配給／1962年日本映画／100分）

……吉永小百合といえば『キューポラのある街』。ジュンが見せた貧しさに負けないひたむきさと前向きな生き方は、その後の高度経済成長ニッポンの象徴。また、これ以降浜田光夫との「純愛コンビ」が日活のドル箱になることに。無気力な若者が蔓延する46年後の今のニッポン。政治経済の立て直し以上に、若者の再生が不可欠。そのためには、百の言葉よりこの映画1本の上映の方が効果的では……。

『祭り TV！ 吉永小百合祭り』開催

今回、吉永小百合主演作品をたて続けに5本もビデオ（DVD）鑑賞することになった。それは、サユリスト代表としてゲスト出演することになった、スカパー！の『祭り TV！ 吉永小百合祭り』の東京での収録が08年10月16日と決定したためだ。

これは『まぼろしの邪馬台国』（08年）（『まぼたい』）が08年11月1日から公開されるのを記念して企画されたもので、放送されるのは吉永小百合出演映画全32作。私と一緒にゲスト出演するのは、「純愛コンビ」として吉永小百合と全43作も共演したあの浜田光夫氏だ。

座談会に向けて60年代初期の吉永小百合作品をあらためて鑑賞すると、中学時代に3本立て55円の日活の映画館へ1人で通っていた時代を思い出すとともに、あらためて小百合ちゃんの魅力を再確認。その第1号として、「青春映画の金字塔」とも言える「この作品」から。

『キューポラのある街』の衝撃度は？

この映画の舞台は埼玉県の川口市。東京のすぐ近くに位置する川口市には、小さな鋳物工場がたくさんあり、各工場には鉄を溶かすための溶解炉（キューポラ）があり、その煙突が林立していた。関西で言えば、西淀川や尼崎のようなところだ。時代は1962年。朝鮮戦争（1950～53年）に伴う朝鮮特需が終わるとともに、職人の腕に頼っていた町工場は次第にオートメーション化された大工場に取って代われようとしていた。

中学3年生のジュンの父親石黒辰五郎（東野英治郎）は腕のいい職人だが、突然クビを宣告されることに。これでは強く願っていた高校進学もおぼつかない。そんな貧しく問題の多い環境下、吉永小百合演ずるジュンはいつも元気で明るく、あくまで前向き。もちろん、そうは言っても時には落ち込み、危機に瀕することもあるが、そこは担任の野田先生（加藤武）の協力や若手職人塚本克巳（浜田光夫）の尽力で無事クリア。修学旅行にも行かず悩んだジュンが行き着いた結論は、働きながら学ぶ定時制高校に進むこと。そこに新たな夢と希望を見出したジュンは、やっと仕事に復帰できた辰五郎や塚本らに見守られながら新しい時代に出発することに。

吉永小百合は『キューポラのある街』でブルーリボン賞主演女優賞を受賞した。これは、当然吉永小百合の明るく前向きな演技が評価されたためだが、同時に以降高度経済成長時代に突入していく日本国をジュンの演技が予告していたため。当時17歳の吉永小百合の演技にはそれだけの衝撃度、インパクトがあったわけだ。その魅力を引き出したのは、これが監督デビュー作となる浦山桐郎監督。46年前の作品を今あらためて鑑賞しても、その鮮明な印象は全く同じだ。

北朝鮮の扱い方に注目！ 「地上の楽園」ってどこの国？

2008年10月11日、任期満了直前のブッシュ政権下のアメリカは突然北朝鮮のテロ支援国家指定を解除した。拉致問題を抱える日本では、従来から拉致問題を核やミサイルの問題と切り離して考えることに絶対反対の姿勢を示していたが、同盟国アメリカからもそんな日本の事情は無視されたわけだ。この映画の原作者は早船ちよ氏。彼女の思想性を問うまでもなく、1962年当時の金日成の独裁下の北朝鮮は、一部で「地上の楽園」と呼ばれていた。したがって、国交関係が樹立していない日本と北朝

鮮の間での在日朝鮮人の日本から北朝鮮への帰還事業は1959年から1984年まで頻繁に続いた。そして、10万人近くの人たちが北朝鮮へ渡ったはずだ。

ジュンの父親辰五郎や母親トミ（杉山徳子）は、ジュンが親友の金山ヨシエ（鈴木光子）とつき合うことや、ジュンの弟のタカユキ（市川好郎）がヨシエの弟サンキチ（森坂秀樹）と一緒に遊ぶことを快く思っていなかった。その理由はヨシエとサンキチが朝鮮人だから。そんな父親に対して、「差別はダメなのよ」とお説教するジュンの姿は微笑ましいが、この映画ではヨシエ・サンキチ姉弟とその父親（浜村純）、母親美代（菅井きん）をめぐるストーリーが、大きなウエイトを占めているので、そこにも注目！ ある事情によって二陣に分かれることになったものの、北朝鮮に帰国した彼らは以降どんな過酷な運命をたどったのだろうか……？

労働組合と「アカ」という言葉に注目！

浜田光夫演ずる塚本は中卒だが、労働組合に好意的でよく勉強している。したがって、辰五郎のクビ切りに対しても、松永親方（殿山泰司）に抗議をして、それなりの補償を求めようとし、それは「労働者の権利だ」と辰五郎を説得する。しかし、職人気質の辰五郎は「俺は労働組合には頼らねえ」とバッサリ。しかも「俺はアカは嫌いだ！」ときたから、これでは塚本も世話のし甲斐がない。

日本は1962年から46年を経た今も労働基本権を軸とした労働法制的根幹は変わらない。しかし、その実態は大きく変わり、正規社員と非正規社員との格差は広がるばかり。そして何と、昨今は『蟹工船』ブームとなっている。そんな今、塚本発言を軸としながら労働組合を考え、「アカ」という言葉の意味を考えてみれば面白いのでは……？

全113本の分布にみる女優吉永小百合とは？

清純派女優としてすべての日本人から愛された吉永小百合にとって、いつどんな風に大人の女優に変身するかが大問題。吉永小百合は1959年の『朝を呼ぶ口笛』から2008年の『まぼろしの邪馬台国』まで、全113本に出演している（ただし、ナレーション出演の『蓮如物語』（98年）と『あした元気にな〜れ！ 半分のさつまいも』（05年）を除く）。そして1959～1969年（14～24歳）の10年間では何と78本も出演している。その内訳は59年1本、60年8本、61年16本、62年10本、63年11本、64年9本、65

年6本、66年6本、67年5本、68年4本、69年2本。1961年の年間16本という数字は、いくら映画が娯楽の王様だった時代とはいえ、驚異的。

他方、1970年から2008年までの38年間での吉永小百合出演作は35作で、ほぼ1年1本のペースを維持している（①原則は1年に1本、②3本 1970年、③2本 79年、84年、88年、92年、④0本 81年、89年、90年、91年、95年、97年、99年、02年、05年、06年）。これは日本映画全体が斜陽産業になっていったことが一因だが、それ以上に吉永小百合が出演作を自ら選び始めたことが最も大きな理由。

浦山桐郎監督の功績は？

そんな吉永小百合が、70年の『幕末』、71年、73年の『戦争と人間』、72年、74年の『男はつらいよ』を経て臨んだのが、浦山桐郎監督の『青春の門』（75年）だ。五木寛之原作の壮大なストーリーの中で吉永小百合が演じたのは、伊吹重蔵の妻タエ役。「汚れ役も辞さず」との心意気でタエ役に挑んだ吉永小百合は、これによって見事に大人の女優に変身することに。そして以降渡瀬恒彦と共演した『皇帝のいない八月』（78年）、高倉健と共演した『動乱』（80年）、『海峡』（82年）、さらに『天国の駅』（84年）、『天国の大罪』（92年）等の社会問題提起作への出演が続き、世紀をまたいで『北の零年』（05年）、『母べえ』（07年）そして『まほろしの邪馬台国』と続くわけだ。

吉永小百合、和泉雅子、大竹しのぶを育て、「女優育ての名手」と言われた浦山桐郎監督は、『夢千代日記』を完成させた1985年に55歳で亡くなったが、吉永小百合主演作を『キューポラのある街』『青春の門』『龍の子太郎』（79年）、『夢千代日記』と4本撮っている。そして彼女には①『キューポラのある街』でブルーリボン賞主演女優賞を受賞させ、②『青春の門』で大人の女優へ変身させ、③『夢千代日記』では原爆症に苦しむ女性夢千代を演じたことを契機として、彼女自身が以降反戦反核と平和への祈りを込めた朗読会をライフワークとしてスタートさせたわけだから、浦山桐郎監督の功績は実に大きい。

第2の『キューポラのある街』は？

映画が大ヒットすれば、2匹目のドジョウを狙うのは業界の常。そんな中『未成年続・キューポラのある街』（65年）がつくられたが、さてその反響は？

他方、1962年に吉永小百合が橋幸夫とデュエットした『いつでも夢を』が大ヒッ

トし、日本レコード大賞を受賞したが、このころから始まったのが歌謡映画。「御三家」となった橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦の青春歌謡を中心としたヒット曲に乗せた歌謡映画がその後続々と登場した。そんな中、1963年の三田明のヒット曲『美しい十代』をモチーフとしてつくられたのが、西尾三枝子と浜田光夫が主演し、三田明も共演した『美しい十代』（63年）。『キューポラのある街』のジュンは高校進学を夢見る中学3年生だったが、『美しい十代』で西尾三枝子が演じたミカは食品ストアに住み込みで働く女店員。貧しい中でも1人健気に生きながら、将来夜学に通おうと夢見ているミカの前向きな姿勢はジュンと全く同じ。浜田光夫演ずるチンピラヤクザとの恋をストーリーの軸としたこの映画で、私は西尾三枝子を吉永小百合と同じようにまぶしく観たものだ。しかしこれは第2の『キューポラのある街』とはなれず、西尾三枝子もそこそこの活躍で終わってしまったのは残念。やっぱり『キューポラのある街』は吉永小百合でなくっちゃ。

2008(平成20)年10月20日記

ミニコラム

裏表紙②③表情二態

後に堺屋太一が「団塊世代」と名づけた私の小学生時代は1955年4月から始まった。この6年間は日本の高度経済成長時代と重なったため、決して豊かではないがかなりマシな生活をしてきたようだ。

裏表紙②は、小学生の頃の端午の節句、子供の日の家族写真。裏表紙③は自宅前のブロック塀の前で浴衣を着て微笑んでいる写真。同じ小学生の時の写真だが、両者を比べてみると、②のふくれっ面が目立つはず。なぜお祝いにそんな顔を？ ②のバックに写っているのは自宅の座敷に飾ってあった五

月人形だ。女の子は3月3日のお雛祭りにお雛様を飾るが、男の子が飾るのは五月人形や鯉のぼりなど勇壮なもの。我が家の1番人気は頭の上にかぶる兜だが、残念ながらそれは1つしかない。そのため毎年兄弟間で起きるのが、その奪い合いバトルだ。おしゃれなベストを着てネクタイまでしているのに、こんなふくれっ面だったのはそのバトルに負けたせい。やっぱり年の離れていない兄弟は、いつも兄の方がいい目をも？

2009(平成21)年3月2日記